

ピクニックに
行こう。



makana

車の中は、どうして眠たくなるのだろう。

心地好い振動と、快適な温度。子守唄のように聴こえてくる音楽。

方向指示器の音は、メトロノームのような音だな〜と、リズムとか、音楽に詳しくない自分の頭で

思い浮かんだ発想に心の中でくだらないことを考えてと思いながら、

前の車間距離を確認してみたりサイドミラーに映りこむ自分の

眠そうな顔が、あまりに不細工だと感じたりしながら、寝てしまわないように、気をつけていた。

隣で運転している、彼女は道順の確認するかのよう

「あっ、つぎは右。．．．．．えっと、あの看板が見えたから、」

独り言のようにブツブツと言っている。

同意を求めるでもなく、ただ知らず知らずのうちに声が出ているかのよう

さほど気にせずいた。

助手席の窓から、外の景色を観る。流れていく速度と同じで、観ている景色が瞬時に変わる。

山の上のほうで、霧に覆われているかのようで、それは、濃霧に飲み込まれているかのようにも見えたし、

其れとは逆で、その山から、濃霧がうまれる瞬間のようにも見えた。其れを観ながら

、さっき心に

湧き上がった不安な気持ちと似ている気がした。

その不安は、きっと気にしなければ、どうってことのない不安。

通り過ぎる風みたいに、邪魔にならない程度の不安。

それでも、湧き上がってきてしまった以上、その気持ちを消すことが出来なかった。

「あっ、見えてきた。」

今度こそは、僕の同意を求めるかのような声に、意識を現実に取り戻す。

「ああ、あそこね。」

「うん。でも、思ってたのとちょっと違うかな。」

彼女の想像より、遥かに良かったのか、悪かったのか、判断できなかったが、僕は何も

返事をせずに、ただ車が駐車するために駐車スペースの白線のなかに、車が納まるのを

じっと待っていた。少しななめ前を出して、ゆっくりとハンドルを切りながら後ろに下がる

彼女は、どうやら苦手らしい。

「あれ。おかしいな。もう一回。」

そう言って、少し車を前を出して、今度は大きくハンドルをきっている。

僕は何も言わずにただ上手く納まるまで、黙っている。

エンジンを切って、後座席から、彼女は手を伸ばして鞆と紙袋を抱えてドアを開けた。
。

ソレをみて、ああ降りていいのだと確信する。

少し駐車したところから歩く。

「ねえ、あそこにベンチあるから、そこにしない？」

「あっ、いいよ。」

指差す場所まで、そんなに遠くもない。

彼女が僕の少し前を歩く。

僕はその後ろを、着いて行く。

傍から見ると、恋人同士だと思うだろうか。

そんなことをぼんやりと考えながら、時折振り返り、話しかける彼女が

いつもよりも饒舌だな思っていた。

見晴らしいの良い場所に、ベンチが設置されていることなんて、今まで考えてもみなかった。

丘の上のベンチに座って、景色を観ていた。

二人ならんで、腰掛けて、ボーッとしている。

風がサラサラと髪の毛を撫でていく。

肩まで伸びた私の髪、耳にかけて、大きく深呼吸して

そのまま空に向かって息を吐き出して、気持ちのいい青を見あげる。

「良い天気だよね……………」

私が零した独り言。

「だな。」

それを、拾ってくれた彼。

そんな彼は今日、会ったときから、酷く何か落ち込んでいるように見えた。

少しでも、元気になって欲しくて、私が無理やり、彼を連れ出した。

元気になって欲しかったという純粋な気持ちと、

少しだけ、今の友人の位置から昇格するかもしれないという

不純な動機が入り交ざっている。

膝の上にある紙袋からパンを取り出して、ひとつを彼に渡す。

さっき、ここに来る前に立ち寄ったパン屋さんで買ったサラダパン。

どうせ食べるなら、外で食べたら美味しいだろうと私提案。

渋々賛成した彼は、私の運転する車に乗ってやってきた。

穏やかな風、清々しいほどの蒼が広がる空のした、

丁度良い具合に、鳥がどこかで囀っている。

「この世は闇に満ちてるよ。」

そう、つぶやくようにポツリと言ったのを、エッ何、と思ってみた横顔は

とても寂しそうだった。

ピクニックみたいだなと思っていた私の気持ちとは裏腹な人だ。

それでも、私はサラダパンを頬張っている。

「いったい、どうしたの？」と言ってみようかと思ったが、口の中で咀嚼したサラダパンと

一緒にその言葉を飲み込んだ。

美味しいものは、きっと、気分もお腹も満たしてくれるだろうと私は思うから、

きっと、彼も、この美味しいパンを食べ終えた頃には、そんな暗い気持ちもどこか

忘れてしまうだろうと思えたからだ。

けれど、そう思っていたのは私だけで、彼の心の底には、そんな軽い捨て去りようがないほどの

重たい気持ちが沈んでいたのだということに、私は気がつかなかった。

「天気、良いのに何？」

出来るだけ、明るく彼に問いかける。

「どれだけ、明るく照らそうが、僕の沈んだ心まで照らすことはないんだよ。

きっと、永遠にだ。」

アララ、詩人はいてきてるな～と思いながらも、きっと、この場合、どうしたのかを聞いてほしいと

思っているはずだ。

「どうしたの？」

「・・・・・・・・彼女が、浮気してた。」

次は、私の方が、今、口に入っているものが喉につまりそうになっていた。

うそ、彼、彼女いたんだ!?

「・・・・・・・・で？」

「どうしたらいいのか、わからない。」

彼女がいたという真実を知った私も、失恋決定だよと、心中で悶々としている。

でも、そんなそぶりを見せないように、彼の相談にのる姿勢は崩せない。

多分、女友達の役割っていうところで、悩みを打ち明けてくれているわけで、

私がスキだよっていう気持ちもまったくもって、鈍感なほど気がついてないわけで。

彼女の心理がわかるのは、同じ異性の私だからわかるんじゃないかとおもっての

打ち明けごとだとわかるから・・・・・・・・。

私の事は、後で落ち込もう。・・・・・・・・これも、少し惚れかけていた弱み。

「それで、彼女にたずねたの？」

「そんなの、聞けるわけないだろ？」

「じゃあ、なんで、そんなこと疑ってんの？」

「疑ってんじゃないんだよ。この目で見たんだよ。」

「・・・・・・・・」

どうやら、浮気現場というとてつもなく現実的な状況を目の当たりにして、彼の心は

沈んでしまっているのだ。何て言って慰めたらいいのか、声をかけていいのか、私には

思いつかない。

・・・・・・・・ほら、浮気って言っても、その人の価値観だからね。

食事を異性と一緒に行ったら浮気だとか、手を繋いだじゃなくて、手を引っ張られているのを見た

っていうのを浮気だっていうのうかも知れないだろうし、ここはひとまず、どういう

状況だったか

聞いた方がいいのかと、普段そういうのに上手くない私の頭の中はグルグルと堂々巡りをしていた。

彼女にぼやいてしまったことで、さほど気にもならないと思っていた不安というやつが、

言葉に出したことで、確定してしまったような気がして、これは見逃してはいけない不安とやらの

なってしまうていた。

隣に座って、難しい顔をして黙ってしまった彼女に、悪いことをしたかなって思っていたときに、

フと視線が絡んでしまった。

-----そんなとき、周りに吹いていた風が一瞬止んだ気がした。

そういうとき、多分、普段は陥らない行動に移してしまうことだってあるのかも知れない。

多分、

こんな穏やかな場所だから、

多分、

いつもよりも緩やかに感じられる時間、

多分、

友達以上恋人未満だから、

多分、

単純に視線が絡んだから、

多分、

心が弱っていたから、

多分、

一番は、お日様の光があまりにポカポカしすぎたから、

-----まあ、考えられることは、どれだけでも思い浮かべることが出来る。

視線が絡んで、なんとなく、お互いキスしてもいいんじゃないかと思えてしまった瞬間だったの

かも知れないとしか今になったら言いようがないけれど、気がついたら、彼女にキスをしていた。

ゆっくりと離れたときに、目を見開いて固まっている彼女に、

「ゴメン。」と口から零れた、いい訳染みた謝りの言葉。・・・・・・もしかしたら、誤りの間違いかも

知れない。

彼女は、フルフルと首を横に振って、

「・・・・・・うん、大丈夫、平気だから、うん、気にしないで。」

全然、大丈夫じゃない感じが言葉と矛盾して、声が震えている。

．．．．．そうだよな。普通、この状況で、こんなことするなんて、何考えてるんだ自分？って

話だよな。それに、彼女の浮気のあてつけをしたような気がした。

そんなことわかりきっているとでも言うように、

「ああ～、これって、浮気になってしまうのかな？」

って痛いぐらいの笑顔を向けてくれている。

「ホントごめん。」

頭を下げて、あげることが出来なくて固まっている頭をポンと手を乗せられて、

「あのさ、どこまでが浮気とかっていうの、わかんないけれど、きっと、彼女も

今みたいなことだったかも知んないよ？悶々としてないで、聞いたらいいよ。」

「．．．．．うん。」

「まあ、心の内は、当の本人しかわからないことだろうと思うから。」

綺麗ごとだと言われてしまいそうだけれども、ほんとうに、このときの彼女との間には、

キスをして、許されるくらいの友情が成立していたような気になっていた。

それは、後から、自分の都合のいいような取り方だったんだと知ることになるのだが・・・・・・・・。

ごく自然にキスをした。

天気が良くて、隣同士にベンチに腰掛けて、会話が止まって、目が合ったときに

彼の顔が今までにないくらいの距離になって、ドキッとした一瞬の間だった。

離れた瞬間に、今の出来事が信じられなくて、彼が謝ってきたときに、

ああ、と少し動揺してしまったのがわかってしまったかもしれない。

この、キスは、いったいなんなのか？と

自分で瞬時に考える。

挨拶的なもの？それとも、恋が始まる瞬間？・・・・・・・・後者はどう考えても違う気がした。

だって、ひたすら謝られれている真実。

なんだか、頭を下げられている私のほうが、後ろめたい気持ちにさせられる。

少なからず、彼と、これから恋がはじまってしまっちゃうのかとすごく淡い期待を

一瞬過ぎた自分自身に対してもあるが・・・・・・・・。

-----誰に対して？

彼の『彼女』と同じじゃないの？

-----ワタシハチガウ。

そんな気持ちを誤魔化すように口から零れだした私の自己防衛的な言い逃れな言葉が

口から零れだす。

「あのさ、どこまでが浮気とかっていうの、わかんないけれど、-----」

きっと、彼には私は出来た友人に映っているのかも知れない。

そんな、キスひとつどうってことないなんて見えているかもしれない。

私が伝えた言葉で、ホッとした安心したような顔をしているのを見た瞬間に、

これで、彼とは、何も生まれないと悟ったのかもしれない。

私が彼に少し惹かれていたから、力になりたかったという不純な考えが上回っていたことに

気がついたとき、彼とは前までの友人関係を作れないなと悲しい気持ちになっていた。

「帰ろうか。」

「・・・・・・・・・・そうだね。」

元来た道を次は下りながら歩く。

駐車場に停めてある、彼女の車まで、ただ黙って歩いた。

隣同士で歩くでもなく、行きと同じで、彼女が先を歩き、僕がその後ろを歩く。

気まずさがなかったとは言えない。

さっきの出来事が、嘘じゃない証拠に、今までの友情とやらが、少しだけ違った形になった。

「ちょっと、待ってくれる？」

車に乗る前に、僕は、彼女に電話をして事の次第を訊ねることにしたのだ。

広い駐車場には、彼女の赤い車がポツンと残っている。その場所から少し離れた場所から

僕は電話をかけた。

彼女に浮気のことを尋ねてみると、どうやら、他に好きな人が出来て、

僕に別れ話をいつ切り出そうかと迷っていたという-----

なんてことない彼女は、このときを待っていたという訳か。

呆気ない別れだ。

電話を切るときの

「-----じゃ」

という言葉は、多分、彼女にかける最後の言葉で、なぜか、僕の心はさっきほど、

暗いものじゃなかったのは、きっと、いま車の中で待っていてくれている存在が

あるからだろうか・・・・・・・・・・。

別れたことを、車に乗って伝えたと、

「-----そう、残念だったね。・・・・・・・・・・きっと、次イイ人が現れるよ。」

そんなありきたりな慰めの言葉と、少し切なそうな微笑を僕にくれた。

帰りの車の中では、何もお互いにしゃべらずに、カーステから流れてくる

少し雑音が入ったテンポがいい、ラジオのパーソナリティーの声を聴きながら帰った。

僕が車から降りるときに、

「元気だしてね？」

笑った顔を見たのが、彼女との一番近い距離で見た最後だった。

彼女は優しい人だと思っていた。

異性の友達っていうのを持ったことがない、僕にとって、彼女は特別な存在のような

気がしていた。

-----それも、この日が最後だった。

あれから、構内で出会っても、笑って手を振って挨拶はするものの、どこか、彼女は

僕と二人きりになるのを避けているように感じた。

二人で、どこかへ行こうかと誘っても、用事があるとかで、ヤンワリと断られる。

何度か、そんなことが続くと、幾ら鈍感な僕でさえ、二人きりで会うのを避けているのだと

わかる。

きっと、あのときのキスが彼女との友人という距離を離してしまったのかもしれない。

それでも、僕は、彼女の存在が日に日に、大きくなっていることに気がついて、

彼女の姿を探すのだ。

彼は車に乗る前に、彼女に電話をしていた。

私は、先に車の運転席に座り、エンジンをかけ、帰りの道で聴く音楽を探していた。

-----が、どれもシックリとこなかった。

彼が戻ってくる間に、選曲しておこうと、考えてはみるものの、どれもが、違う気がした。

いつもなら、自分の気分でコレを掛けようと思うのに、どうしても自分優先に考えれなくなる。

今は、彼の心情を考えると、気の使わない、それでいて

邪魔にならない音楽がいいと思う
。自分以外の人のために音楽を選曲する難しさに苦戦していた。

そして、彼の電話の内容が気になっていた。

チラリと彼のいるほうへ目線を這わす。

遠くの方で電話をかけている彼の背中が丸くなって見えたような気がした。

結局、助手席に彼が座った時点でも、音楽を決めることが出来なくて、

地元のFMラジオを選択して、車を走らせた。

「彼女とは別れた。」

別れを見届けた、友人として、私が彼にかける言葉も、瞬時で気の効いたものも、言えずに

ありふれた、定番な、それでいて、良くも悪くもない、そんな慰めの言葉、オマケのよう
なとってつけたよう

な今までにないくらいの下手くそなひきつった笑顔。

それから、私は何か切り出して言葉を掛けてあげたかったけれど、上手く伝えることが出来
ない

歯痒さで自分が情けなかった。こんなときに、気が利く言葉のひとつくらい掛けてあげたい
のに、

ただ、彼がそれ以上気持ちが沈むことがないように運転と隣の彼に集中していた。

結局、そのまま帰るまで、私達は口を開くことがなかった。

そしてラジオにしたおかげで、そのパーソナリティーがお喋りするのをぼんやりと

耳を傾けて救われていた気がした。

このときほど、ラジオの威力絶大効果に感謝したことがなかったような気がする。

彼が、車を降りて歩いていく姿を、まわりの景色に溶けていくように、滲んで見えたのは

私の目から涙が零れていたということに気がついたからだ。

多分、彼とは、このままの関係で変わらない。

感情が増えもしないし、減りもしない、そんな友情関係がいいのだ。

もし、変わるとすれば、自然とこの関係が消滅していくことだ。

今は、そうでもないかもしれない。

長い人生で、ほんの一瞬だけ時間を共有したピクニックに行ったという思い出を

思い出すか、どうかという、そんな他愛のない時間を過ごした二人だったんだと、

懐かしむことがあってくれたらいいなと、そんなふうに思いながら、私は彼に惹かれ始めて

いた

気持ちを少しずつ消していくことにしないといけないと、彼の後姿が角を曲がったときに

決めたのだ。

ぼんやりと過ごす日々。

彼女はあれから僕を避けている。

意識する存在に変化した僕の中で、その位置は大きかった。

元彼女（モトカノ）に失恋した痛みも、それなりに痛かったような気がするが、

今、彼女に避けられていて、話したいのに話せないほうが、その倍の痛みがある。

心臓が悪いわけじゃないのに、キュッと締め付けられるような痛み。

すぐ、手が届きそうな距離だったはずなのに、どんどん、遠くなっていく。

今も、構内で見つけた彼女は誰かと楽しげに笑っている。

笑いあいたいのに、笑えない。

僕は、彼女に話しかける勇気さえも今はどこかに落としてきてしまったかのようだ。

彼がたまに、こっちを見ているのがわかっていた。

それは、どういった意味なのかは、私には分からないわけでもない。

でも、私も意固地になってしまった部分があって今更、また前のように

彼に話しかけたりするのを躊躇われた。

彼から、普通に話しかけられたら、また元通りに笑うことが出来るだろうか・・・・・・・・・・。
-----そんなふうに思いながらも、一日は過ぎていく。

それが積み重なって、月が過ぎて、気がつけば、季節も変わり夏になっていた。

話しかける機会も、歩み寄ることも、思い返せば幾らでもあったのだ。

それでも、要らない意地が邪魔をして、私には何も出来ないでいた。

今更、自分から声をかける勇気も出ない。なんて声をかければいいのかさえも

わかなくなっていて、そんな負のループに掴まったかのようにグルグルと答えが出るわけも無く

ただ、この気持ちだけが大きくなっていくことに溜息が大きくなったような気がした。

声を掛けられないのなら、メールだったら、いいんじゃないの？と久しぶりに作成する相手の

名前を選択して、『久しぶり』っていう件名にして、本文は何を打ったらいいのかと考えていた。

動かない指先。

一行も進まない画面。

-----そんなときだった。

「よっ。」

メール文を考えていたときだった。

頭を上げると、久しぶりの顔と、突然のことに、鼓動がおかしなことになってる。

「ウワッ。」

その証拠に、自分の口から出たであろう言葉が、とてつもなくおかしなものだもの。

人間、本当に驚いたときは、可愛らしい、「キャッ」という乙女みたいな声が出ないらしい。

多分、私限定で・・・・・・・・。

今、私が出した言葉は、名付けるならそう、「オッサン雄叫び」だな。

．．．．．なんて、訳のわからない思考になっているのも、心がどうかしてしまっているひ
とつだと思う。

早鐘を打つ鼓動と、きっと真っ赤な顔をしている自分を見ているであろう彼の目をまともに
見ることが

出来なくなっているのに、いったい、何の用なのだろうと、ドキドキしている私の手を引
っ張ってく。

「ちょっと、付き合ってよ？」

私の鼓動は爆発寸前だった。

驚いている彼女の手をとり歩きだす。

一度、落としてしまった勇気を拾い上げて、これが最後だと思い行動に移した。

-----行き先は決まっている。

「ねえ、何処に行くの？」

「内緒だ。」

「これから私バイトなんだけど？」

「サボればいい。」

「・・・・・・・・あのねー、サボればいいって簡単にいうけれどね？」

「ごめん。でも今日だけ僕に時間をくれないか？」

歩みを止め、彼女の目を真っ直ぐに見る。

しばらく、見つめあっていたが、

はぁーと息を吐いて、

「わかったわ。でも、バイト先に電話するから少し待っててくれる？」

「わかった。」

少し離れた場所でバイト先に連絡しているようだった。

久しぶりに近い距離感に、懐かしい感じと今までにない感情の混濁。

あの時は少し長めだった彼女の髪は、顎のラインに切りそろえられていた。

ショートボブがすごく似合っている。

暑い季節のはずなのに、何故か彼女の周りだけが爽やかな風が吹いているようにさえ

感じて見えるくらいの清涼感。

-----ああ、重症だなと自分、と恋焦がれていた異性にやっと話ができるようになった中学生のような

今の感情に、一体幾つなんだよと自分突っ込みを心で入れながら、電話を終えた彼女が

振り返り僕のほうを見ている顔に、もう一度ドキリとした気持ちになる。

「ゴメン、お待たせ。」

「えっと、大丈夫？」

「うん、なんとか、シフト代わってくれそうな子に頼んでみたから、平気よ。」

「・・・・・・・・ごめん。」

「あのね、何？さっきまで強気な感じだったのに急に弱くなっちゃって。」

そう言って笑う彼女の顔をみるのもすごく久しぶりで嬉しくなる。

自分ってほんと単純だよな。

そして、その笑顔をもう一度近い距離でみれているこのふわっとした幸せを手放したくないという

絶対的思いが今、自分が起こそうとしている行動に背中を押してくれている。

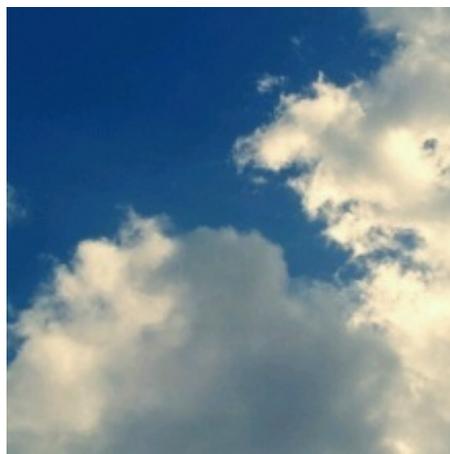
「ねえ、どこ行くの？」

僕は、紙袋を見せる。

それは、おいしいと評判のパン屋さんのマーク。

「・・・・・・・・えっと。」

「ピクニックに行かないか？」



あのときのように、あのベンチに座って、

きっと、そこから始める。

パンをひとつ手渡して、食べ終わったところに、君に気持ちを伝えるよ。

「ねえ、もしかして、それってサラダパン？」

「-----いや？」

でも、あの時と違うのは、

-----僕が好きなパンだということだ。

彼女もきっと気に入ってくれるだろう。

f i n

ピクニックに行こう。

<http://p.booklog.jp/book/69717>

著者 : makana

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/makaronisarasara/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69717>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69717>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ